

【研究論文】

中国大陸における日本語ディベート大会の現状 及び問題点

薛華民

(南京理工大学)

張小英

(九州大学)

The Current Situation and Problems of Japanese Debate Tournament in Mainland China

Xue Huamin

(Nanjing University of Science and Technology)

Zhang Xiaoying

(Kyushu University)

本稿では、9回目と10回目の「CASIO 杯中国日本語専攻学部生・院生スピーチ・ディベート大会」におけるディベート試合を紹介した上で、その問題点及び改善できる点を提示・分析した。そして、大会出場選手を対象にアンケート調査を行い、回収したデータを分析して提示した。更に、今後中国大陸におけるディベート教育をより良く発展させるための改善策についても検討した。

キーワード： ディベート大会、問題点、日本語学習者

Key words: Debate Tournament, Problems, Japanese learners

Debate and Argumentation Education - The Journal of the International Society for Teaching Debate
2019, Vol.2, pp. 19-27.

1. はじめに

中国大陸では日系企業の進出やネットの普及とともに、2000年以降高等教育機関や学校教育以外の機関を筆頭に日本語学習者数が大幅に伸びた。特に大学における日本語学部が増加し、第二外国語として日本語を履修する学生も増えている。国際交流基金が2015年度に実施した、「海外日本語教育機関調査」の結果報告書『海外の日本語教育の現状 2015年度日本語教育機関調査より』によると、調査終了時点までの中国大陸の日本語学習者数は2012年に比べて一割弱減少したものの、依然として首位を占め、とくにその中の日本語専攻学習者数は21万人以上で、全世界の日本語専攻学習者の約三分の二を占めているという。当報告書には専攻学習者の習得レベルについては詳しく示されていないが、筆者の経験では大学入学時に日本語をゼロから始めた学習者でも、その多くは二年次の終わり頃には日本語能力試験N2に達し、三年次にはN1に達する。加えて、専攻以外でN2に達する日本語学習者も少なからずいるため、中国大陸においては中上級日本語学習者の層が非常に厚いと言えよう。

これだけの学習者数を有する中国大陸では修(2014)が指摘したように、現在の日本語教育が(1)育成方法、(2)使用教材、(3)カリキュラムなどにおいて大きな転換期を迎えて

いる。2018年1月末に『大学各学科教学国家スタンダード』（《普通高等学校本科专业类教学质量国家标准》）が公開され、外国語学科における論理的・批判的思考力の養成の必要性が唱えられているが、未だに有効な教育（指導）方法が明らかになっていない。

新しい日本語教育の方法の1つとして、2000年以降台湾と韓国では、ディベートが注目を集め、ディベート大会（コンテスト）が盛んに行われている（井上2006、井上・蓮見・諏訪2015）。ディベートの日本語教育に対する有効性はこれまでに吉川・小川（2000）、田代（2008）、衣川（2013）等により報告されており、中国大陸の日本語教育にもディベートを導入できるのではないかと筆者は考える。

幸いなことに、上海外国語大学が2008年から主催してきた「CASIO杯中国日本語専攻学部生・院生スピーチ・ディベート大会」は2016年度（9回目）から正式にディベートを導入した。本稿では正式にディベートを実施した9回目（2016年）と10回目（2017年）の大会を対象とし、大会の現状と問題点を明らかにした上で、ディベート大会の改善及びディベート教育の普及について検討していきたい。

2. 大会の概要及び問題点

「CASIO杯中国日本語専攻学部生・院生スピーチ・ディベート大会」は2008年から毎年の11月に上海外国語大学において行われ、昨年度で10回目となる。初回からタイトルにディベートという語があるにも関わらず、8回目（2015年度）まではディベートは実施されていなかった。正式にディベートが導入されたのは9回目（2016年度）からである。9回目と10回目の大会はスピーチとディベートの二つの部に分けられ、選手たちは当日午前中各自で即席スピーチを行い、午後から抽選で決まった四人チームでディベートに出場する。スピーチとディベートの両方の成績で最終的な順位が決まる。ここではディベートを中心に検討していく。

2.1 大会の概要

背景や趣旨について、大会のパンフレットに「中国の大学における日本語言語文学専門教育は量的にも質的にも目覚ましい発展を遂げたが、大きな転換期を迎えている。世界情勢と中日関係が絶えず変化するのに伴って、大学生たちが学ぶべきものも変わり、これから直面しなければならないチャレンジと課題も増える。そこで教育方法の改革に力を入れ、学生の批判的思考力、イノベーション能力、異文化コミュニケーション能力を高める必要がある。当大会はまさにその改革の成果を展示・検証する場となり、非常に重大な意義を有している」というような内容が記述されている。

2.1.1 選手

主催側は毎年8月末頃、書類（テーマスピーチの原稿＋その音声ファイル）選考を通じて、全国数多くの応募者の中から24名の優秀な日本語学習者を大会出場選手として選定する。9回目と10回目の出場選手の出身校は以下の通りである。

表1. 9回目(2016年)大会の出場選手の出身校

順番	性別	大学名	順番	性別	大学名
①	女	華東政法大学	⑬	女	北京語言大学
②	女	天津外国語大学	⑭	男	吉林大学
③	女	上海理工大学	⑮	女	東北財經大学
④	女	ハルピン理工大学	⑯	男	西南民族大学
⑤	女	大連外国語大学	⑰	男	上海外国語大学
⑥	女	上海対外経貿大学	⑱	女	遼寧師範大学
⑦	男	広東外語外貿大学	⑲	男	河北農業大学
⑧	女	南京郵電大学	⑳	女	同済大学

⑨	女	西南大学	⑳	女	大連理工大学
⑩	女	天津科技大学	㉑	男	四川外国語大学
⑪	女	北京第二外国語大学	㉒	女	東華大学
⑫	女	北京外国語大学	㉓	女	上海外国語大学

表2. 10 回目(2017 年)大会の出場選手の出身校

順番	性別	大学名	順番	性別	大学名
①	女	上海外国語大学	⑬	女	吉林華僑外国語学院
②	男	広東外語外貿大学	⑭	男	中南大学
③	女	南京大学	⑮	男	南京郵電大学
④	女	東華大学	⑯	女	吉林大学
⑤	女	四川外国語大学	⑰	女	厦門大学嘉庚学院
⑥	女	上海財経大学	⑱	男	上海交通大学
⑦	男	華東政法大学	⑲	女	復旦大学
⑧	女	福建師範大学	㉀	女	青島大学
⑨	女	北京第二外国語大学	㉁	女	外交学院
⑩	女	大連民族大学	㉂	女	天津外国語大学
⑪	女	同済大学	㉃	女	上海外国語大学
⑫	女	上海商学院	㉄	男	南開大学

2.1.2 審査員

審査員の内訳は中国人日本語教育専門家 5 人及び日本人教師 1 人、計 6 人である。9 回目と 10 回目の審査員は以下の通りである。

表3. 9 回目と 10 回目の大会の審査員

9 回目 (2016 年)		10 回目 (2017 年)	
氏名	肩書き	氏名	肩書き
修剛	教育部高等学校外語教学指導委員会主任、教授	同左	、
周異夫	中国日語教学研究会会長、教授	同左	、
徐一平	北京日本学研究中心主任教授	同左	、
譚晶華	上海外国語大学教授	同左	、
林工	上海外国語大学日本人専門家	同左	、
龐志春	上海外国語大学教授	許慈恵	上海外国語大学教授

2.1.3 論題

24 人の選手は抽選で 6 チームに分けられる。すべてのチームは一回しか試合に出場しないため、計 3 試合となる。試合ごとに異なる論題が用意される。

また、論題は試合開始の 40 分ほど前に発表される。9 回目と 10 回目の大会の論題は以下の通りである。

表4. 9 回目と 10 回目の大会の論題

	9 回目 (2016 年)	10 回目 (2017 年)
第 1 試合	競争について	肯定側：ダブル 11 のキャンペーンセールの特典の方が大きい 否定側：ダブル 11 のキャンペーンセールのデメリットの方が大きい
第 2 試合	独身主義について	肯定側：シェア自転車を発展させるために政府が主導権を握るべきである 否定側：シェア自転車を発展させるために市場が

		主導権を握るべきである
第3試合	金儲けについて	肯定側：モバイル決済は従来の決済手段に取って代わることができる 否定側：モバイル決済は従来の決済手段に取って代わることができない

2.1.4 ディベートの流れ

ディベートの流れなどについては9回目と10回目と同様である。

試合の準備

先述したように、24人の選手はまず抽選で6チームに分けられる。次に出場順番（3試合の中のいずれか）及び立場（肯定か否定か）もまた抽選で決まる。各チーム内の役割分担はチーム内の話し合いで決められる。肯定側は肯定側1番、肯定側2番、肯定側3番、肯定側4番となり、否定側は否定側1番、否定側2番、否定側3番、否定側4番となる。

そして、論題は試合開始の40分ほど前に発表されるため、両チームは40分ほどしかない準備時間を利用して異なる控え室で準備を行う。電子辞書や携帯などの通信機能を備える機械は使用禁止である。

試合の進行

（まずは個人意見陳述。司会者によるルールなどの説明が終わると試合が始まる。）

肯定側1番による意見陳述（持ち時間1分間、以下同様） ⇒ 否定側1番による意見陳述 ⇒ 肯定側2番による意見陳述 ⇒ 否定側2番による意見陳述 ⇒ 肯定側3番による意見陳述 ⇒ 否定側3番による意見陳述

（次に指名討論に移る。司会者による持ち時間やルールなどの説明が終わると試合が再開する。）

否定側4番と肯定側4番から指名された肯定側選手による討論（それぞれ1分間の持ち時間なので、合計約2分間、以下同様） ⇒ 肯定側4番と指名された否定側選手による討論 ⇒ 否定側3番と指名された肯定側選手による討論 ⇒ 肯定側3番と指名された否定側選手による討論 ⇒ 否定側2番と指名された肯定側選手による討論 ⇒ 肯定側2番と指名された否定側選手による討論 ⇒ 否定側1番と指名された肯定側選手による討論 ⇒ 肯定側2番と指名された否定側選手による討論

（次に自由討論。司会者によるルールなどの説明が終わると試合が再開する。）

肯定側と否定側がそれぞれの持ち時間（5分間）以内に討論し合う。

（最後に総括）

否定側4番によるまとめ（持ち時間1分間、以下同様） ⇒ 肯定側4番によるまとめ
試合の途中、休み時間は設けられていない。選手たちの持ち時間は合計32分で、司会者によるルールの説明などに要する時間を加算すれば、一試合の時間は約40分である。

審査（採点）方法

審査員たちはそれぞれの選手に点数を付けるが、チームの勝ち負けは判定しない。即ち、チームで戦うにもかかわらず、実際は個人戦となる。審査（採点）基準は語学力（満点20点）、思考力（満点20点）、協調性（満点10点）、反応の素早さ（満点5点）及び全体的雰囲気（満点5点）の五つの要素からなる。これらの審査基準は、事前にメールで各選手に送られている。

2.2 ディベートの試合から見られた問題点

論題について

9回目の大会の論題はすべて「〇〇について」という形であり、非常に曖昧で漠然としたものだと言わざるを得ない。選手たちは肯定側と否定側に分けられているが、どのような立場を取れば良いのかははっきりしていない。結果的には、肯定側は「〇〇が良い」という立場で、否定側は「〇〇がわるい」という立場で議論を進めるしかなかった。ところが「〇〇」の部分の定義は行われていないため、選手たちの理解には一致しないところが多く、かみ合わない議論

も多かった。

10 回目の大会の論題はより明確になっているが、依然として問題がある。まず、試合ごとに異なる種類の論題（第1 試合は価値論題、第2 試合は政策論題、第3 試合は事実論題）が出されているが、各論題の難易度が異なるので、評価の基準が統一されにくい。つぎに、第2 試合の論題については、シェア自転車の運営現状についての説明がなかったため、多くの選手は現状さえ把握できないまま、現実とかけ離れた議論を進めるしかなかった。さらに、第3 試合の論題の中の「ことができる」という表現は二通りの意味（一つは、技術的に取って代わることができるという意味、もう一つは社会発展のトレンドとして取って代わることができるという意味）に受け取れるため、選手たちも異なる理解をして噛み合わない議論で試合を進めた。

選手による議論について

出場選手の出身校が全国各地に位置しているため、当大会はかなり広範囲で知られていると言える。ところが、多くの出場選手が有効な議論を構成できず、論拠が伴わない議論で水掛け論になったところが多かったことから、多くの大学はディベートの指導を効果的に実施していない（後述のアンケート調査の結果から確認できる）ことが分かる。

審査員について

正式にディベートを導入した 9 回目の大会が終了後、講評を務めた審査員の徐一平氏は、審査員全員は日本語ディベートの経験がないため、如何に審査または採点をすれば良いのかわからないと明確に述べた。徐氏はほかの審査員に確認した上でそのように述べたと思われるので、当時の審査員たちは日本語ディベート未経験者だと考えて良いであろう。10 回目では、審査員たちは、ディベート未経験者ではないにしても、ディベート試合を適切に判定できるぐらいの知識や経験を有することは期待できないと思われる。

また、試合後、試合の振り返り、フィードバックなどをするのは、審査員の重要な役割であるにもかかわらず、9 回目と 10 回目の大会ではほとんど見られなかった。

その他

論題の発表は試合の直前であり、通信機能を備える電子機器によるリサーチもできないため、ディベート未経験者（後述のアンケート調査では多くの参加者はディベート未経験者であることが確認できた）にとっては難しすぎるのではないかと思われる。

そして、9 回目の大会の際、選手の発言後、時折「素晴らしい発言だ」という司会者の介入があったが、10 回目の大会には、司会者による介入が見られなかった。

3. 大会参加者を対象に行ったアンケート調査

ディベートに対する認識や大会参加動機、参加後の感想などを把握するために、主催側の協力を得てインターネットを通じて 9 回目と 10 回目の大会参加者（合計 48 人）を対象にアンケート調査¹を実施した。学部生 21 人、院生 13 人、計 34 人の回答を得た。全員日本語学習歴 2 年以上で、3 年以上は 28 人である。半分以上の回答者は日本に留学した経験がある。前述したように、ゼロから始めた日本語科の学習者でも、多くは三年次に N1 に合格できる。従って、各校から選ばれてきた参加者は全員日本語上級者だと考えて良い。

3.1 ディベートに対する認識

ディベート経験の有無について、34 人の回答者の中、26 人が「ない」と回答した。また、「ある」と回答した 8 人の中で、日本語でディベートをしたことのある人は 4 人で、ほかの 4 人は中国語か英語でディベートをしたことがあると回答した。データ数が少ないが、中国大陸の日本語学習者の多くはまだディベートを経験したことがないと考えられる。

ディベートが難しいかどうかについては、34 人の回答者の中、30 人が「非常に難しい」または「比較的難しい」と回答した。そして、さらに、今後ディベートを習いたいかという質問に、34 人中 30 人が「非常に習いたい」または「習いたい」と回答した。さらに、所属する大学の日本語ディベートに関する授業やイベントの有無については、34 人の回答者の中、25

¹ <https://www.wjx.cn/jq/18924562.aspx>

人が「ない」²と回答し、この 25 人の中の 19 人が自分の大学に関連する授業や活動を開設してほしいと回答した（残りの 6 人はあってもなくても構わないと回答）。これらの結果から、多くの学習者はディベートのことを難しいと考えながらも、学校の授業で系統的に習いたいと考えていることがわかる。

3.2 大会に参加する動機

大会に参加する目的について様々な回答が得られた。回答数の多い順に、「自分の日本語力を確かめたい、または試合を通じて日本語力を伸ばしたいから」（20 人）、「ほかの大学の日本語学習者と交流したいから」（5 人）、「視野を広げたいから」（4 人）、「ディベートを体験したいから」（4 人）、「大学の推薦で」（3 人）、「賞を取りたいから」（1 人）のような回答であった（一人の回答者による複数回答があるため、合計人数は回答者の人数より多い）。

上述の結果は当大会の特徴と関連していると考えられる。当大会は地域レベル（通常は省または市レベル。大きくても幾つかの省が合同）で行われるアフレコ大会、スピーチコンテストと翻訳（通訳）コンテストなどと違って、全国の数多くの大学から選手が集まっている。それに、ディベートという高度な言語能力などが要求される形を取っている。より明確に比較するため、現在の各種イベントが要求する主な言語能力を表 5 にまとめた。

表 5 各種イベントが要求する言語能力

	聞く能力	読む能力	話す能力	書く能力	コミュニケーション力	論理性	思考力
スピーチ大会	×	×	◎	◎	×	○	○
アフレコ大会	△	×	○	×	×	×	×
作文コンテスト	×	×	×	◎	×	○	○
翻訳大会	×	◎	×	◎	×	×	○
ディベート大会	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎

（◎：非常に要求される；○：要求される；△：やや要求される；×：要求されない）

スピーチ大会は基本的にテーマスピーチ部分と即興スピーチ部分に分けられる。テーマスピーチ部分は事前に決められたテーマに沿って原稿を書き上げ、暗記して発表するというプロセスで進められ、主に「書く能力」と「話す能力」が問われる。原稿を書く過程の思考力と論理性も必要不可欠だと考えられる。即興スピーチ部分はテーマスピーチの後、個別にテーマが書いてあるくじを引き、数分間準備してそのテーマについて発表するという形で行われ、思考力および言葉の論理性が要求されると推測できる。

アフレコ大会はアニメかテレビドラマを選び、元の音声を消して自分の声で再生（表現）するという形を取り、元の音声を聞いて（聞く能力）、それにいかに近づけるか（話す能力）が勝負のポイントである。極端に言えば、これは日本語の文法が分からなくても、発音だけ覚えればできるものである。

作文コンテストは事前に決められたテーマに沿って原稿を書き上げるだけである。従って、「書く能力」が最も重要になる。また、原稿を書く過程の思考力と論理性も必要不可欠だと考えられる。

翻訳大会は決められた文章を読んで、その内容を目標言語の文字で表現する大会なので、言うまでもなく「読む能力」と「書く能力」が要求される。

それに対して、ディベート大会は、「証拠資料を読む」、「立論を書く」、「スピーチをする」、「他人のスピーチを聞く」、「他人とコミュニケーションを取る」、「対策を考える」や「論理的に反駁する」などの作業からなり、すべての能力項目に及ぶため、上述のどの種類のイベントよりも総合的な日本語能力が試される。従って、当大会は中国の最も完全な日本語

² 「ある」と回答した 9 人の記述では、「会話や表現の授業の一環」と述べたのが 4 人、「スピーチとディベートという授業」と述べたのが 2 人、残りの 3 人の回答は無効だった。

能力イベントと言っても過言ではない。最も完全な日本語能力イベントだからこそ、多くの優秀な選手たちは自分の実力を確かめたい、または自分を磨きたいと思っていることが推測される。

3.3 ディベート大会参加後の感想

大会参加後の感想について以下のような回答が得られた（一人の回答者による複数回答があるため、合計人数は回答者の人数より多い）。

- 「自分の力不足を実感した」（16人）
- 「たくさんの友達ができて交流を深めた」（10人）
- 「ディベートを楽しめた」（3人）
- 「日本語力が伸びた」（2人）
- 「貴重・特別な体験だった」（2人）
- 「自己チャレンジができた」（1人）
- 「優秀な学習者がいっぱい、励まされた」（1人）
- 「今後日本語を通じて何を学ぶべきかがわかった」（1人）
- 「臨機応変の能力が磨かれた」（1人）

大会参加動機について、「自分の実力を確かめたい、または伸ばしたい」という回答が最も多かったが、大会参加後の感想では、「自分の力不足を実感した」との回答が最も多かった。この「力不足」には二つの意味が考えられる。一つは、ディベート自体が要求する主な言語能力が高すぎて、自分の実力はまだ不十分なこと、もう一つはほかの（ディベートに慣れている）選手に比べて、自分の実力はまだ不十分なことである。いずれにせよ、ディベート教育が行き届いていないことに原因があると思われる。

また、数少ないながら、「ディベートを楽しめた」というような回答も3人いるので、これも中国大陆で日本語ディベートが普及する可能性を示唆している。

3.4 大会に対する意見

調査を通じて、大会全体の運営や実施に関して、選手（参加者）から多数の意見が得られた。論題については「論題をもっと明確にすべきだ」、「すべての選手が十分に理解して参戦できるように、わかりやすくすべきだ」などの意見が得られた。

大会のルールについて、「現ルール（試合開始 40 分前に論題発表）では、時間が足りないし、思考力の考察にならない」、「持ち時間が少なく、選手の意見を全部述べることができない」、「試合開始前に、もっと準備時間が欲しい」、「現ルールでは、チームワーク（協調性）が重要視されていない。この点を調整すべきだ」などの意見が寄せられた。

最後に、大会の運営面について、「もっと大きい会場で開いてもらいたい」、「大会のスケジュールをもっと緩くしてもらいたい」、「主催側との連絡が随時取れるように改善して欲しい」、「欠場者が出るような特別状況を想定して対策を講じておくべきだ」などの意見があった。

4. 中国大陆における大会の改善及びディベート教育の普及に向けて

前述した問題点及び参加者たちの意見をまとめて、大会の改善可能な点を提示した上で改善策を提言したい。

まず、改善可能な点としては以下のようなものが挙げられる。

- (1) 論題。誤解や曖昧さがないようにより明確にすること。
- (2) 大会のルール。十分に準備できるように、論題の発表は数日ないし数週間前に発表すること。また、十分に個人意見を陳述できるように、持ち時間を増やすか集中させること。そして、協調性・チームワーク意識を高めるために個人戦ではなく、チーム戦にすること。
- (3) 審査員。専門知識を持ち、試合の審査とフィードバックできる審査員を養成すること。

(4) 選手。試合の際に十分に議論できる選手を育成すること。

次に改善策を述べたい。

(1) に対する改善策として、日本のディベート甲子園、台湾の日本語ディベート選手権や韓国の大学生日本語ディベート大会などで取り上げられた論題を集め、それらを参考して論題を決めるという方法が考えられる。すでに実際に取り扱われた論題を用いることで、誤解や曖昧さを回避できるのみならず、議論のしやすさもある程度確保できる。

(2) に対する改善策は、ディベート甲子園で使用される「全国中学高校ディベート選手権ルール」または台湾や韓国の大会のルールを参考にしながら作るのが良いと考えられる。ディベート甲子園、台湾や韓国の大会のいずれも数ヶ月前に論題が発表され、選手たちに十分な準備時間を与えている。また、上述のディベート大会における各ステージの持ち時間は4～6分で、十分に個人意見を陳述できる長さである。それから、いずれもチーム戦のルールとなっているので、協調性・チームワーク意識を高めることができる。

(3) については、大会の開催に先立ち、日本から講師を招いて審査員養成ワークショップを開催するのが良いと考えられる。前述のように、現在の審査員は関連知識や経験を有しないため、試合を適切に判定できないだけでなく、試合後、選手たちの今後の成長につながる振り返りやフィードバックの務めもできない。上述の問題はいずれも学習と練習を通じて解決できるものなので、審査員養成ワークショップの開催が有効であると考えられる。

(4) に関しては、日本と台湾の経験を参考にし、中国で日本語学習者を募集し日本から講師を招いてディベート合宿を行うのが良いと考えられる。また、前述の『大学各学科教学国家スタンダード』の公開とともに、中国で「スピーチとディベート」という科目を設置した大学も多数現れたにも関わらず、日本語学習者向けのディベート教材はまだ整備されていない。したがって、日本語ディベート教材を開発してより多くの大学が日本語ディベート教育を導入すれば、選手の育成問題が解決できる。

上述したようにすることで、大会全体の改善ができると同時に、ディベート教育もある程度普及できると予想される。ただ、実施するには、大会の主催側及び日本・韓国・台湾の専門家の協力が必要不可欠である。

5. おわりに

以上、中国大陸における唯一の全国レベルのディベート大会の現状及び問題点を踏まえて、その改善策を提示してきた。前述したように、これからの日本語教育には論理的・批判的思考力の養成が望まれている。論理的・批判的思考力を養成するには、日本語ディベート教育に勝る方法がないと言っても過言ではない。今後日本語ディベート教育がますます広がると考えられる。全国レベルで、多くの日本語教育専門家に注目されている当大会の問題点を明らかにした上でそれらを改善することは、日本語ディベート教育を広げる上で大きな意義を持っていると言えよう。

その一方、中国大陸における日本語学習者は非常に多く、一つの大会による普及または影響の範囲が限られている。より広範囲でディベート教育を普及させるためには、教材の開発や教員の育成が必要であると考えられる。このことを今後の課題としたい。

引用文献

井上 奈良彦(2006). 台湾における日本語ディベート教育の実践研究 財団法人交流協会日台交流センター日台研究支援事業報告書.

井上 奈良彦・蓮見 二郎・諏訪 昭宏(2015). ディベート教育の展望 花書院

衣川 友紀子(2013). 正規留学生を対象としたディベートの取り組み—他者の視点に着目して

- 立命館高等教育研究,13,121-137.
- 田代 ひとみ(2008). 論理的思考能力育成のためのディベート授業—議論の分析から明らかになったこと— 日本語教育方法研究会誌, 15(1),38-39.
- 吉川 尚美・小川 早百合(2000). ディベート授業の実践とその効果 日本語教育方法研究会誌, 7(1),14-15.
- 教育部高等学校教学指导委员会(2018). 普通高等学校本科专业类教学质量国家标准,高等教育出版社.
- 修 剛(2014). 日语专业建设与跨文化交际能力培养、第三届全国日语院长/主任高级论坛.